

伊豆の今

三島・源兵衛川に茶わんかけら

先人風習 現代「天敵」に？

埋没量不明 団体、環境整備奔走

9月になってもまだ暑い日が続く、三島市では地域が誇る清流の源兵衛川が子どもたちをはじめ、多くの人でにぎわう。そんな源兵衛川で、茶わんなどのかけらが度々見つかる。かつて割れた茶わんなどを投げ入れる風習があり、現在では川の環境整備の課題となっている。

室町時代、中郷地区の

米作りのために整備され、源兵衛川は湧水量の減少などによりドブ川とな

た」と語る。ため、川の見回りとかけら拾いは欠かせない活動として続けている。

ったが、市民や団体、行政が協力し、美しい川を復活させた。その中で多

数見つかったのが陶器のかけらだった。同川の環

境整備に取り組むNPO法人グラウンド

ワーク(GW)三島

の専務で、元都留文科大教授の渡辺豊博

さんは川底一面が、

かけらで真っ白だっ

ていない状態が続く。その

この詳細不明の風習

明という。

ように見えても、大雨な

どによる増水で川底がか

き混ぜられ、かけらが出

現するという終わりの見

えないう。

この詳細不明の風習

明という。

この詳細不明の風習

明という。

この詳細不明の風習

明という。

この詳細不明の風習

明という。

この詳細不明の風習

明という。

この詳細不明の風習

「活動通じ歴史伝える」



5分ほどで拾い集めた約30個のかけらを見せる渡辺さん＝三島市内

に、渡辺さんは一つの仮説を立てる。市内の川や三嶋大社の神池にウナギが多く生息し、ウナギは三嶋大明神の使者、水神の化身とされていた経緯から「盆の灯籠流しなどと同じく、割れてしまった大切な茶わんや湯飲みを神の使いの住む川に投げ込んで供養する、そん

な理由ではないか」と推測し、「源兵衛川は地域住民の水文化であり、宗教的象徴でもあったのだろう」と続けた。GW三島はこの陶器のかけらを除去するため、参加者を集めて「ちゃんかけひろい」を展開している。その目的には三島市にかつてあった不思議な風習を知ってもらう狙いもある。渡辺さんは「先人が行ってきた地域の風習は、源兵衛川が地域に根付いた川であるから生

まれた歴史的特性がある。知られる機会のなかった三島市の不思議な風習を「ちゃんかけひろい」の中で伝えていく」と話す。

(伊豆日日新聞 北島彰浩)